

● 東北支店工事関係者による座談会

# 未曾有の 東日本大震災をうけて 1年間を振り返る

工事関係者として思うこと ——



東日本大震災と津波は日本の国土、国民、自然環境、そして施設や民家などの建造物に大きな被害をもたらしました。過酷な状況のなかで最前線に立つ東亜の社員はどのように考え、どのように行動し、どのような明日を建設していくのか？その思いを語り合っていました。

## いまだかつてない経験

—— 2011年3月11日午後2時46分に発生し、日本観測史上最大のマグニチュード9.0、最大震度7を記録した東日本大震災から1年が経過しました。東北支店に籍を置く皆さんは、この未曾有の大地震を体験されたわけですが、まず被災した時の状況をお聞かせください。



木内広史

横手駅前再開発作業所

矢内貞裕

仙台社の園作業所

大竹克尚

東北支店建築部

松田英貴

市名坂作業所（仙台）

**遠藤** 仙台港工事事務所に勤務していますが、実家が（津波で大きな被害を受けた）宮城県名取市閉上にあるので、震災後すぐに両親の安否確認に向かいました。両親の無事を確認したのち、油タンカー船の入港航路確保のため、早急に担当の塩釜港がれき撤去業務に取りかかりました。

**色川** 私は現在気仙沼工事事務所に勤めています。震災当日は久慈でケーソン本体工事を担当。作業員は午前中に帰し、事務所は完成検査竣工書類作成中の社員3名のみでした。地震発生時には焦ってスリッパで飛び出してしまうほどでした。すぐに車で山に逃げましたが、久慈市民の津波に対する意識や訓練が浸透していると感心しました。避難当初はそこまで逃げなくても、と思いましたが逃げて正解でした。疑って対応していたらどうなったかわかりません。

**竹内** 私は現在八戸作業所勤務です。岩手県久慈市の現場詰所で被災後、避難先では車の中で一晩過ごしました。翌日何とか事務所に戻りましたが、机の高さまで水が来た形跡があり、泥だらけで仕事のできる状態ではありませんでした。家族とは地震翌日に会うことができました。停電や燃料の確保が困難ななか、余震・火事などの対処や緊急時の連絡方法を確認してから業務につきました。

**木内** 私は秋田県横手市の作業所勤務だったのですが、出張の帰路、東北新幹線の車中で被災しました。新幹線の中で数時間を過ごし、その後JRさんが用意してくれた学校の体育館で一晩過ごしました。家に着いたのは13日の午前2時頃です。

**松田** 石巻高齢者住宅作業所勤務ですが、地震の2日前に石巻で国の工事の完成検査があり、引き渡しを終えた直後に被災しました。東北道を運転中に尋常でない揺れに危険を感じて道路わきで待機しました。ラジオの情報だけを頼りに、高速を降り、夜中に自宅に到着。電気がなく停電のなか、家族と一晩過ごし、翌日支店に出社しました。

**矢内** 仙台社の園作業所に勤めています。多賀城から産業道路で支店に帰るため運転しているところを被災しました。支店到着後、余震があり電話も不通、電気も停まっているなかで被災状況を確認しようとしたが無理と判断。解散して家まで歩いて帰りました。翌日会社に出社し、お客様の建物の被災状況の確認に入りました。

## ご要望・要請に応えるために自らが動く

— 勤務中に被災され、家族や仲間の安否を確認してまもなく業務に戻られたようですが、業務を再開された時の様子はいかがでしたか？

**大竹** お客様からは「すぐにやってほしい」というご要望が多かったのですが、協力会社の皆さんも（家族の安否確認が最優先なので）当初は手配することができず、最初の1週間くらいは我々職員が応急処置として自ら動くしかありませんでした。

**矢内** 余震が続くなか、お客様の店舗内の片付けに取り掛かりましたが、あの時の状況では弁当やガソリンなどの燃料の支給がないと作業員を集めることはできませんでした。

**松田** 緊急対応したお客様の多くが民間の商業施設であり、「震災翌日から地域の人のためになんとか営業を再開したい」という切実なご要望に我々も何とか応えたいという気持ちになりました。

**木内** 業務再開当初は特に第三者災害防止に努めました。

**色川** 海岸線がどこで寸断しているかわからない、そして泊る場所も確保できていないなかで気仙沼へ向かいます。



冠水位置

仙台・塩釜港工事事務所（被災状況）



遠藤正彦  
秋田港作業所

竹内 官  
久慈工事事務所

色川典夫  
久慈工事事務所

〈司会進行〉  
金田隼佳  
本社  
経営企画部  
CSR推進室

※勤務地は被災当時

## ● 東北支店工事関係者による座談会

た。用意したプレハブハウスや簡易ストープでは寒くて眠れなかったため、3月中は起重機船の食堂に泊まることにしました。啓開作業については、ダイバーはいましたが、海水が濁って危険な状況のため潜らせることはできませんでした。また、気仙沼では、どこに行くにも道路の冠水箇所が多く、嵩上げて車両を通すことが先決でした。

**遠藤** 普通は資材計画や作業内容等を考えてスケジュールが立てられますが、今回はどのように施工するか？何が沈んでいるのか？どう揚げればよいか？すべてがわからない状況のなかでの作業でした。

**竹内** 個人が特定できるようなもの、例えば写真などを見つけた場合には市役所に届け出るようにしました。このようなことも震災復旧工事に関与した者の責務ではないかと思いを行動しました。

——安全面において、特別に配慮されたことはありますか？

**竹内** 作業員の安全配置、潜水時間の管理、連絡合図、および声の掛け合いを徹底して行いました。また、余震が頻繁に続くなかでの作業であり、常に避難場所や連絡体制の維持にも留意しました。我々も事前に避難場所を確認し、緊張感をもって避難訓練を行いました。

**遠藤** 私たちは引き上げ時にテンションが架かっているなかで切断作業をするという状況にあったので、各船に職員が乗り、朝礼で作業員に周知、安全管理を徹底しました。

## 協力会社や作業員と力を合わせて

——皆さん想像を絶する環境のなかで業務に臨んでいることがわかりました。次に、協力会社やその作業員の方々の対応で感じたことをお聞かせください。

**大竹** 完成が間近になると、お客様から少しでも早く営業を再開したいという強い要望が出て、社員や作業員が交代で24時間連続で作業するという苦労もありました。震災という非常時だからこそと思いましたが、皆さんよく対応してくれました。

**色川** 本当に協力会社やその作業員にはよくやっていただいて感謝しています。起重機船を手配しましたが、原発の影響で南方からの協力が難しいなか、北海道から駆けつけた協力会社は、奥尻の地震の経験がおり、啓開作業を行うには何が必要かわかっており、チェーンソーや鎌から油まで全部積んで来てくれました。こういう人たちがいたから現場がスムーズにいったと思っています。

**竹内** 避難場所から通ってくる作業員も多く、そのような状況で協力していただきありがたかったです。

——皆さんが担当された工事のなかで、強く印象に残っていることがありましたらお願いします。

**松田** 特殊な状況下においても無災害で工事を完了することができたことが、一番でした。図面・見積書があつて契約があるわけではなく、お客様の意向やご要望を感じ取りながら、一定の品質を確保することを念頭に置きつつ先取りしたかたちで工事を進めていきました。営業が再開すると、今度は夜間しか作業できない状態となり、非常に変則的な体制を組まなければならない状況になりました。その分、やり遂げたあとはお客様からかなり感謝されました。

**矢内** 私は、支店にて対応しましたが、お客様からのご要望に迅速に応えることができたのは、協力会社の協力があったからだと感謝しています。

**色川** これからが土木の本格復興になります。技術面では、撤去して新設という本来の業務に入っていくこととなりますが、例えば岸壁が傾いているなかで重機を使わずを得ないという、構造上の安全性を十分確認できない状況も





考えられます。技術者として十分注意しなければならないと考えています。

### 東亜の技術・ノウハウ・経験が活きる

—それでは東亜の技術面について少し詳しくお願いいたします。

**色川** 当社のペルーガ・システム(リアルタイム高密度水中施工管理システム)は、水深の調査や海底状況の確認などで有効に機能しました。

**遠藤** 塩釜港の啓開作業では、立体的に視覚的に捉えることができ、沈んでいる車の輪郭さえもはっきりとわかりました。

**色川** 陸前高田の気仙大橋仮橋工事などは、起重機船が入れるよう河川を浚渫し、船舶を活用して杭打ち・桁架けを行うなど、河川上と陸上の同時施工で早期に完成できたのは、まさしく東亜の土木技術、ノウハウや経験が活かされたものと思います。

**竹内** 発注者に代わって、当社が市、県および保安部の方々とのさまざまな調整を主体的に行いました。その点はお客様に評価していただいていると思います。

**松田** 被災状況を把握し、すべてを壊すのではなく必要な範囲だけを補修することについては、今までの施工および現場経験が役に立ったように思います。

### この震災の経験を明日に活かす

—1年間における被災地でのさまざまな作業を振り返ってみて、技術者として思うところをお聞かせください。

**大竹** 海岸に近いところ、地盤の強度が低い場所での構造物の建設は、今後配慮が必要になると考えられます。最新技

術の免震や制震技術で造られたビル等は、私の見る限りほとんど損傷を受けていませんでした。当社も建築業界も進むべき道は間違っておらず、今後も免震や制震技術は重要な技術であると思います。

**遠藤** 耐震岸壁の護岸は現状維持で保たれていましたが、その他の岸壁等は1メートル程度下がっていました。今後も重要な岸壁は、多少コストがかかっても耐震岸壁にすべきだと思いますし、トータルとしてコストパフォーマンスが良いことがわかったと思います。

**色川** 釜石の防波堤は被災を受けながらも津波到達時間を遅らせ、結果的に多くの人命を救ったと思われます。一方、津波の引き波でかなりの損壊を受けました。引き波の外力にも今後少し考慮する必要があると思います。

**木内** 建物の震災復旧工事では、まず被害状況を詳細に把握することが必要で、その後、お客様のご要望と修繕内容をすり合わせる作業が大事です。

**竹内** 今後復旧については、新規製作以外に補修(例えば、穴の開いたケーソンの水中での補修)など壊れたものを直して再利用するものも出てくると思いますが、破損状態の確認など非常に難しい技術になると思います。そして、1年を経過して思うことは、私たちが当事者なのですが、早くも震災に対する意識が薄れがちな面が出てきており、これを風化しないように努めることが大切だと思います。

**全員** この1年、仕事だけでなく生活面も含め厳しいものが多々ありましたが、モチベーションは高かったです。人や地域のために仕事をしたという自負があります。

座談会開催日：2012年3月23日(金)

